

---

# 神に導かれて

SHIROKUMA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神に導かれて

### 【Nコード】

N0630C

### 【作者名】

SHIROKUMA

### 【あらすじ】

僕たちの住むこの世界、実は世界は1つだけではないのだ。俗に言う異世界というのは実在する、ただ僕達が気づかないだけであつて。しかし、どの世界でもどこかで必ず他の世界と繋がっている、例えば土地であったり、歴史であったり、そして漫画の世界であったり。そんな2つの世界がぶつかり合い繋がってしまった時、一人の少年が混乱を食い止める為動き出す。少年に名前は無い、ただ分かっているのは少年が『世界の番人』であることだけ・・・

## 序章（前書き）

この小説は少年ガンガン掲載中の漫画『鋼の錬金術師』を下書きにした作品です。ですが、オリジナル登場人物が主人公であり、また他のオリジナル登場人物も多く登場します。その為、原作からかけ離れた内容の部分が多々あります。もし、そのような内容がお嫌いな読者の方々は読むのを遠慮ください。なお今回の作品が私の最初の投稿であり、内容に誤字脱字などがあると思いますので、ありましたらご連絡ください。

## 序章

神に導かれて

～ 序章 ～

ここは何処かに地下室

壁にはありとあらゆる場所にたくさんの魔方陣のような物が書かれている

「早く、この練成陣を完成させないと。いつこの世界が消えてしまうか」

そう呟く少年が一人、部屋の真ん中で黙々とそれを描いていた

事の始まりは数週間前

ニュースで報道されたのが始まりだった

「ここで臨時ニュースをお伝えします、さきほど全国各地で震度5強ほどの地震が発生しました」

「それと同時にその震源と思われる場所に魔方陣らしきものが現れたとの情報も入っています」

さらに、この現象が日本だけではなく、世界中に発生して、世界中が震撼した

その日からニュースはこの話題で持ちつきりとなった

古代文明だの宇宙からの通信だの自然界からの警告だの、この話題を知らない人は一人もいないだろうというほどに

しかし、それでもその後世界に大きな異変がなくこの後何が起くるかも知らずに人々は普段の生活をおくっていた

一人の少年を除いて

その少年は事が起こると同時にこの現象の原因が何かに気づいた原因は無限とあるパラレルワールドの一つがこの世界に干渉したため

その世界がこの世界の漫画でもある『鋼の錬金術師』の世界だということも

案の定、少年が原作の本を調べてみると話の内容が少しずつ変わっている事が分かった

なぜ、この少年だけがそれに気づいたか

それは、少年がもともとこの世界の住人ではないからであろう

だが少年がひとり事実を知ったところで世界中が信じる訳もなく着々と時間は過ぎていった

そしてついに異変が起こった、ホームクルスとなのる集団が世界

中で殺戮を始めたのだ

世界が動いたときはすでに遅し、ホムンクルス達にこの世界の人間が適うはずがなかった

少年はこの世界を元に戻す為に再び異世界へ渡ることを決意

『鋼の錬金術師』の世界に渡るための準備を始めていた

そして今に至る

地下室は運よくホムンクルス達にも見つからず、ついにその練成陣が完成した

少年が練成陣に両手をつけると青白い光と共に少年はこの世界から消えた

少年が再びみた世界は白い世界

そして一つの大きな扉だった

「よお」

少年が声のほうを向くとそこには黒い人のような物体がいた

「ほかの世界からのお客さんとはなあ、お前何者だ」

「僕は世界の番人の1人を名乗る者、きみがこの世界の真理かな？」

「当たり前だ、それじゃお前がこの世界がぶつかった世界の番人ということになるな」

「そちらも正解」

少年はニツと笑いながら言う

「それで、むこうの世界の歪みを直す為にこっちの世界にきたと言う訳か」

「そういうこと、だから力を貸してくれるとうれしいんだけど」

しばしの沈黙、先に口を開いたのは真理だった

「いいぜ、お前をこの世界の住人としてやる、この世界の真理すべてを見せた上でな」

「ありがとう」

「ただし、通行料として、今の体はいただくぜ。こっちの世界で再び生まれ直すこつたな」

「構わないよ」

「それじゃ、交渉成立だ。また会おうぜ」

そう真理がいうと、あの扉が開き無数の黒い手が少年を扉の中に引きずり込んだ

少年の頭の中に膨大な量の情報が流れ込んできた、それは苦痛と

いっても不思議ではない物

そして少年が再び眼を開けると

見えたのはやさしそうに微笑む女性だった

こうして少年はこの世界に、レイラス・エルリックとして新たな生を受けたのだった



## 序章（後書き）

まだまだ未熟なうえ文才ありませんので文書ですが遂に初投稿、まだ序章な為先が見えませんが、とりあえずエドの弟というありえない設定で書いてしまいました。次からはちゃんとエド達もできます。こんな未熟なFF小説ですが今後もよろしくお願いします。

## 第一章 記憶

神に導かれて

〈 第一章 記憶 〉

あらから数年がたった

いまだに記憶の戻らないレイラスは家族達と普通の生活をおくっていた

「アル兄、エド兄まってよ」

「遅いぞレイ」

「ちよつと兄さん、レイが追いつけないような速さで走ったらいけないって」

金色の髪的少年達は自分達の家に行っていた

「だって早く見せたいじゃんか母さんに」

「そりゃそうだけど」

結局レイが追いつくのを待って再び家に向かって走り出した

こんどはレイが追いつける速さで

「母さん、母さん見て見て」

「あら、エドワードにアルフォンス、今度は何を作ってくれたの？」

「ええとね、これ」

エドの手の上にはきれいな石のネックレスがあった

「これ母さんにプレゼント」

あるがそう言って母さんにそれを渡した

「ありがとう、エド、アル」

「いいなあ、兄ちゃん達は錬金術が使えて、僕にはさっぱり分からないんだもん」

2人の兄が褒められてばかりで、膨れたように言う

「いいのよレイラスは、お母さん3人が仲良くしてくれれば幸せだから」

それを聞いて3人は一緒に微笑んだ

そしてだれもがこの幸せな時間がずっと続くと思っていた

しかし、その時間もそう長く続かない

ある日のこと3兄弟が家庭菜園から野菜を採って帰ってくると

目に飛び込んできたのは床に倒れた母親の姿だった

流行病だったらしくそのまま母親は3人をおいて逝ってしまった

3人は泣いた、そしてアルとエドは決心した錬金術で再び母親を蘇らせることを

葬式も終わりその夜レイは何か引き寄せられるように母親の墓に向かった

真夜中だったが、墓は月明かりに照らされてとても明るかった

「ねえ母さん、僕はもうしたらいいのかな？兄ちゃん達は錬金術で何かしようとしてるし」

レイはうつむいて言う、その時だ、レイは誰かの声を聞いた

「レイラス、君はこんな所で立ち止まっているわけにはいかないだろう？」

「誰？」

レイは周りを見回すが誰かがいる気配はない

「まだわからないのかい？」

再び声がする

「君は誰なの？」

「僕は君、君が忘れていた本当の自分」

「君は僕？」

「思い出して、なぜ君がここにいたのかを」

「僕はどうしてここに・・・」

そう言われると、レイの頭のなかにいろいろな物が流れこんできた

異世界 世界の歪みと崩壊 番人 そして真理

「思い出した、僕は世界の歪みを正す為に、この世界にきたんだ」

「そう、君は世界の番人、さあ急いで君のやるべき事はもうわかっている筈だ」

「ぼくがやらなきゃいけないのは・・・この世界のホムンクルス達を止めること」

するともう声は聞こえなくなった

「母さん、僕わかったよ。やらなければいけないこと」

そう言つと見えないけどレイには母さんが微笑んでくれたような気がした

レイは頷くと自分の家に戻っていった

それから数ヶ月がたった

レイは記憶が戻ったがいつも通りの生活をおくっていた

兄達は人体練成の研究に思いっきり取り組んでいて、あまりレイと遊ばなくなった

レイにとってはちょっと寂しかったが好都合なことだ

そして、兄達2人が師匠をみつけて出て行つてすぐ、レイは行動をおこした

ロックベル家に泊まっていたレイはその夜

ウィンリイが寝たあと、工房で仕事をしているピナコの下に向かった

「ばっちゃん、ちょっと話があるんだけど」

「なんだいレイ？真剣な顔をして」

「僕、ちよつと中央に行こうと思っているんだ」

「そうかい」

レイは予想していたピナコの反応とあまりにも違ったので驚く

「驚かないの？」

「何年、お前達をみてきたと思っているんだい、考え事している事なんてお見通しだよ」

「それじゃ」

「だけど、訳ぐらいは教えてほしいねえ」

そうしてレイは自分の事をピナコに話はじめて

「・・・信じてもらえる?」

「あんたはうそはつけない子だよ、信じるさ。自分が信じた道をいきなさい」

「ばっちゃん・・・」

「ただし忘れちゃだめだよ、あんたが本当はだれであろうと今はレイラス・エルリックだってことを」

レイは一礼して、次の日の朝早く家を出て中央に向かっていった

## 第二章 大總統（前書き）

この話で『鋼の錬金術師』の登場人物である大總統、キング・ブラッドレイが登場しますが、原作ではホームクルスの設定なのですが、話の進行上と作者の勝手な好みのため特別な設定として大總統は人間という設定にしていますのでご了承ください。



## 第二章 大總統

神に導かれて

く 第二章 大總統 く

朝一でリゼンブルを出て、その日の昼には中央についた

「さて、とりあえず大總統に会わないとね」

レイはそう呟く、さつさと大總統の自宅へと足を動かした

そして、しばらくしてレイは大總統の自宅の近くまで到着した

「やっぱり警備が厳重だなあ、でも抜けられないほどではないね」

とりあえず屋敷の裏に回って潜り込む準備をするレイ

その時だ、誰かがこっちに向かっている気配がした

レイはすぐさま物陰に隠れる

レイが覗き込むとそこにいたのはレイも知っている人物だった

「（エンヴィー……!）」

「出ておいでよ、居るのはわかったいるよ」

ばれていることを知りレイはエンヴィーの前に姿を現した

「君はだれ？ここは大總統の家だけど何の用ですか？」

「ちよつと大總統に用があつてね、そう言う君はなにしてるのかな？」

「僕も似たようなものだよ、もっともホムンクルスの君に教える筋合いはないけどね」

レイはニツとエンヴィーに笑つて言う

それを聞いて驚くエンヴィーそして、レイを睨んだ

「君、何者？」

「言つたでしょ、ホムンクルスに教える筋合いは無いって」

「それじゃ、力尽くではかせるまでだあ！！」

そう言つてエンヴィーはレイに飛び掛つてきた

それをレイは避ける

そしてレイは両手をパンと合わせて地面に乗せた

青白い練成反応と共に1本の剣が練成される

「お前練成陣・・・人体練成をやつたのか」

「いや、僕はやってないよ」

そういいながらレイはエンヴィーに斬りかかる

しばらく攻防戦をしたあと、エンヴィーは家の屋根の上に飛び乗った

それをレイも追って飛び乗る、屋根の上ではエンヴィーがレイを待っていた

「今日は見逃してあげるよ、名前ぐらい別れる前に教えてくれたっていいじゃないんかい」

「そうだね、僕はレイラス・エルリック、世界の番人を名乗る者だよ」

「それじゃあね、番人のおちびさん」

そう言い残して、エンヴィーは屋根伝いに去っていった

「これでホームンクルス達に僕の存在が伝わったね」

取りあえず再びレイは大總統の家に忍び込んだ

錬金術で一つの部屋に隠れるレイ、しばらくすると部屋に1人の男が入ってきた

「誰だね、そこにいるのは」

「こんばんは大總統閣下」

「何者だね？子供といえど他人の家に勝手に潜り込むのはゆるさ  
れないよ」

大總統は笑いながら言ってくるが目は決して笑っていなかった

「勝手に入ってきて申し訳ありません、しかしどうしても申し上げ  
たい事があります」

「ほう、その目をみると嘘ではなさそうだね、話してみなさい」

レイは大總統に世界のこと真理のことホムンクルスのこと、レイ  
の知っていることを話した

「信じていただけるでしょうか？」

「信じる？普通なら信じられないだろう。しかし、先も言ったよ  
うに君の目は嘘をついているようには私には見えん」

「それじゃあ」

「ああ、信じよう。それに私もホムンクルスの存在は知っていた、  
私の命を狙っていることもな」

「先ほど、僕もホムンクルスと接触をしました」

「まあ、いずれにせよまた会わなければいけない、ところでレイ  
ラス君といったかな」

「はい」

「君、国家錬金術師にならないかね？」

突然の大總統の提案に驚くレイ

「たしかになれるならなりたいですが、僕はまだ8歳です」

「そこは私が何とかしよう、軍としても君のような逸材をほつとくのは勿体なくなてな」

「そうですか」

「ただし、將軍職についてくれるならだ」

大總統の条件にまたも驚くレイ

「將軍職つて大總統！！軍職に就くのは構いませんが將軍職というのは無理がありませんか！？」

「そこは問題無い、私が説得しよう。それに君ほどの実力者を下にしとくのは気が引ける」

「それって職権乱用なんでは」

なと無茶苦茶なとレイは思ったが、たぶんこの人は止められない  
と思いその条件をのんだ

「それでは、また明日この時間に司令部のほうまできてくれるかな？」

そういつて大總統は例に時間の書かれたメモと紹介状を渡してきた

「わかりました、それでは」

レイはそれを受け取る再び窓から大總統の家を出て行った

## 第二章 大總統（後書き）

またも途轍もない設定が飛び出しましたが、お願いですので暖かい目で見守ってください・・・

### 第三章 神導の錬金術師

神に導かれて

く 第三章 神導の錬金術師 く

次の日、中央司令部に向かったレイ

門番に大総統の執務室に案内されて

部屋の奥には大総統が座ってこつちを見ている

「やあレイラス君、待っていたよ。さあ遠慮せずに座りたまえ」

「失礼します」

レイは大総統に言われて前の椅子に座った

座ると大総統は書類の入った封筒と、銀時計を差し出してきた

「君に国家錬金術師の銀時計と二つ名を授けよう」

レイは封筒から書類をだして読んだ

「神導ですか？」

「そう、神に導かれし錬金術師『神導の錬金術師』だ」



「また大それた二つ名をつけてくれましたね」

苦笑いしながらレイは言った

「嫌かね？」

「別に、そういうわけではありませんよ」

「そうか、それでもう一つ君の階級だが少将にしておいた、他の將軍にはもう伝えてある」

「少将ですか、大丈夫なんですか？こんな子供をいきなりそんな階級にして」

「大丈夫だろう君なら、執務室はこの部屋の隣にある執務室を使ってくれて構わない、それに優秀な人材も用意した」

「（僕ならって無責任な、この人が国のトップでだいじょうぶなのか？）」

そんなことを考えながらため息をつくレイに対して笑う大總統

「それと君の住む場所だが、司令部の近くに1つ家を用意させてもらった、後で見に行くといい」

「ありがとうございます、何から何まで準備していただいて」

レイは頭を下げて礼を言った

「いやいや、君ががんばってくれたらそれで構わないよ」

それに対して大總統は笑って返してくれた

「それでレイラス・エルリック少将、君に頼みたい仕事はホムンクルス達の研究と資料の管理だ」

「了解しました。その中には賢者の石や人体練成についても含まれるということで良いでしょうか？」

「うむ、君の活躍を期待してるよ」

「ご期待に答えられるよう努力します」

レイはとりあえず大總統に一礼したあと、自分の執務室に向かった  
といってもすぐ隣の部屋の為すぐについたが

部屋に入るとそこにはごく普通の執務室

隣の部屋に続く扉を開けるとそこには部下の為の部屋があった

とりあえず、あとでゆっくり見るとして、執務室の机の上にある  
軍服に着替えることにした

軍服はいつ計ったのか知らないがレイにぴったりだった

かたの階級章は少将を示している

その時だ執務室の扉が開いた

「失礼します、エルリック少将」

入ってきたのは2人の青年と女性だった

「君達は？」

「本日よりこの配属となりました、ルイナ・メイウエル准尉です」

「同じく、アレック・ライナ曹長であります」

「君達が大總統の言っていた優秀な人材って訳か、僕はレイラス・エルリック『神導の錬金術師』だよろしく」

2人はその言葉に敬礼する

「でも本当に驚きました。大總統閣下に言われたときはまさかと思いましたが、本当に子供とは」

「はは、僕もまさかこの年で將軍になるとは思わなかったよ、それとそんなに硬くならなくていいよ」

とりあえずその日は書類等の整理で終わってしまった

レイは部下の2人を帰したあと自分の仕事を終わらせて、大總統の用意してくれた家に帰っていった

さて帰宅途中のレイの部下2人

「メイウエル准尉、エルリック少将どう思いますか？」

「最初はまさかと思ったけど、納得したわ。書類も仕事も普通の大人と変わりなかった」

「俺も、今日始めて会ってみて、あの人ならついて行けるような気がします」

「私もよ、まだ子供だけどあの人なら信じてついていける気がする」

とりあえず、部下の信用を得たレイ

さてそんなレイはと言うと、大總統の用意した家の大きさにまでも仰天していた

「大總統・・・一人で暮らすのにこんなにおきな家を用意しなくても」

その家にはリビングや客室だけではなく地下には設備の整った錬金術の研究室

広い蔵書室にはあらかじめ大總統が用意した普通では手に入れることのできない錬金術の本

そして、人体練成や賢者の石など、軍の最高機密である資料まであった

呆れながら家に入るともう驚く気力も無くなったレイ

とりあえず、簡単な夕食を食べてレイはベッドに倒れこんだ

### 第三章 神導の錬金術師（後書き）

ついに主人公が国家錬金術師になりました！！  
でもこの設定は無理すぎますね・・・（汗）  
こんな最強主人公の上、この年で將軍職ですよ！！  
まあ、とりあえずなんとか書いていくのでよろしく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0630c/>

---

神に導かれて

2010年10月10日11時11分発行